

## アメリカ史學に於ける

## 「科學學派」について

今 津 晃

アメリカ史に於ける近代——近代といふ言葉を用ひること自體が既に適當でないかもしれない——が南北戦争及び再建期を経た一八八〇年代に始まるといふことは、曾てアイオワ大學の A. M. Schlesinger (後にハーヴァードの史學教授) が其の著 "New Viewpoints in American History, 1922" に於て立證したところであつたが、そのことは當時に於けるアメリカ史學の發展段階の考察からも首肯せられるところであらうと思ふ。歴史學の如き社會・經濟の發達と著しい因果關係を有する學問に於て此の事實が證明されることは、其の時代の有する劃期性を如實に示すものである。シュレジンガーは同じく右の書に於て「アメリカ史學の近代的復興は一八八〇

年代に明らかになつた」と言ひ、又 Allan Nevins も「一八七五年以後のアメリカ史學に於ける顯著な事實は、ヨーロッパ流のテーマから完全に脱するといふ傾向であつた」と述べて、史學に於ける新世界の獨立——たとひ充分な意味での獨立ではないにしても——が此の時期であつたことを指摘してゐる。然らば、それは如何なる事實を指すのであるか、そして米國史學の「近代的復興」が「現代アメリカ史學」として一つの完全な自覺體となるのは何時であるか。要するに「成年に達したアメリカ」の、史學の面に於ける様相を取り上げることこそ、小稿の主眼なのである。そして、そのことは、アメリカ史學に於ける「科學學派」の成長——その誕生とその成人——に

ついでついで考察することに他ならないのである。

世界史に於て一八八〇年時代は所謂「世界國家系秩序」の形成され始める基礎的な時期であつたが、それはアメリカに於ても九〇年代の膨脹政策の前段階として内的充實を示しつゝある時代であつた。アメリカ史學史上に於ても亦この時期は充實の第一段として、種々の新變化を生んだ時期であつた。そのことは、(一)十九世紀の中頃から顯著になつて來た史料蒐集の此の時期に於ける著しい活潑化、(二)海外留學に於て自信を得た幾多の學者達の歸國による大學歴史教育の變化——ゼミナール、大學院組織の異常な發達——、(三)社會科學上の諸學會の設立、等に於て示された。國家的意欲を盛つた「アメリカン」を冠する諸學會の設立、特に一八八四年に於ける「アメリカ歴史學協會」の創立(九五年に Amer. Hist. Rev. 創刊)は、文化科學上の新展開であり、「科學學派」の勃興、従つて現代アメリカ史學の誕生を示す好例である。此等の變化の中に於て、特に吾々は大學に於ける歴史教育について觸言せねばならない。蓋し、それを最大の地盤と

アメリカ史學に於ける「科學學派」

して「科學學派」は其の運轉を開始したからである。大學に於て歴史研究が而もドイツ的ゼミナールの方法に於て盛になつたことは、全く新しい事實であつた。それ以前に於ては歴史著作の大半はノン・アカデミシャンによつて擔はれてゐたと言つても過言ではないのであつて、過去の大學の歴史研究又は教育が如何に貧弱であつたかは、多くの事實が之を示すところである。ハーヴァードの Henry Adams、ミンガン(後にコーネル大學總長)の A. D. White、シムズ・ホプキンスの H. B. Adams は、斯かる雰圍氣の中から立ち上つて「科學學派」の第一世代を創り上げた先達であつたと言へるのである。彼等の活躍がいかに目ざましかつたかは、彼等が異口同音に「學生達は最早教へを求めて海外に行く必要はない」と自信たつぷりに語つてゐるところによつて知られるが、彼等の膝下に集つた學生達の中から「科學學派」の大立物が輩出した事實は、何よりも之を雄辯に物語るものである。

Henry Adams → A. B. Hart, Edward Channing →

第三十一卷 第三・四號 四七

※  
S. E. Morison

H. B. Adams → F. J. Turner → Carl Becker.

J. W. Burgess → H. L. Osgood → Charles Beard

※先生の先生、ハンリー・アマムスの文學的手腕と先生チアニングの精緻なる學識とを兼備した最近に於ける新英州學者層の傳統の代表者として評判が高い。

かくして、彼等を直接・間接の先生として、歴史を徹底的に客觀性に於て——世界觀を排してまでも客觀的に——捉へんとする「科學學派」は幾多の細流に分れ、純爛豪華な圖を展開するのである。

(1) Nationalist School

H. V. Holst (1841—1904)

James Schoutler (1839—1920)

J. W. Burgess (1844—1931)

J. F. Rhodes (1848—1927)

John Fiske (1842—1901)

(2) Historians of People

J. B. McMaster (1852—1932)

F. P. Oberholzer (1868—不詳)

(3) The Imperial School of Colonial History

H. L. Osgood (1855—1918)

G. L. Beer (1872—1920)

C. M. Andrews (1863—)

Edward Channing (1856—1931)

(4) Interpretive Writings

Woodrow Wilson (1856—1924)

Charles Beard (1874—)

M. C. Tyler (1835—1900)

V. L. Parrington (1871—1929)

E. L. Pattee (1863—)

P. H. Boynton (1875—)

(5) Biography

A. J. Beveridge (1862—1927)

Allan Nevins (1890—)

D. S. Freeman (1886—)

(6) Frontier and Sectional Historians

R. G. Thwaites

Theodore Roosevelt (1858—1919)

F. J. Turner (1861—1932)

G. W. Alvord (1868—1928)

- H. E. Bolton (1870—不明)  
 F. L. Paxson (1877—)  
 C. F. Adams (1835—1915)  
 J. T. Adams (1878—)  
 S. E. Morison (1887—)  
 W. A. Dunning (1857—1922)  
 W. E. Dodd (1869—1940)  
 P. A. Bruce  
 Alexander Brown  
 E. McCrady  
 U. S. Phillips
- (7) Co-operative Histories
- I. Winsor, "Narrative" を先驅とする  
 A. B. Hart (1854—)  
 "Amer. Nations"  
 Allen Johnson (1870—1931)  
 "Chronicles"  
 A. M. Schlesinger (1880—) 等  
 "Amer. Life."

(Mikraus, "A History of Amer. Hist." に 120.)  
 死亡の年は1940以後は不明。  
 史家の名前はアメリカ史の史家に限定。

「アメリカ史學に於ける「科學學派」について」

「科學學派」勃興以前のアメリカ史學は、之を二期又は三期に區分することを許されやうとも、決して「學」として在りうるものではなかつた。曾てそれは功利主義の道具であるか、愛國精神の極端な表現であるか、文學の分枝であるか等々のいづれかであつて、「米國史の父」と言はれるバンクロフトに於てすら、無批判的性質、經濟的要因の無視が見られ、ギゾーに言はずならば "true democratique" であり、オスグッド教授をして "prosecuting attorney" と呼ばしむるものがあつた。「科學學派」が斯かる欠陥の克服として純粹に客觀的な歴史を書かんとシランケに其の方法論的規範を求めたことは故なしとしないのであり、アメリカ史學の現代的發達は先づ大學に於ける技術的充實から出發したのであつた。その方向に於て幾多の細流があるにしても、夫等はいづれも客觀性を信條とする點に於て一致するものがある。かゝる客觀性の主張こそは其の後の歴史研究に一貫して流れ來るに於てなほ永久に強調せられ続けるところであらう。

「科學學派」は其の限りに於てアメリカ史學に不朽の地

歩を占めると言はねばならない。そして、此等の細流の中から、アメリカ史はアメリカの條件に於て即ちアメリカ的自覺に於て書き直されねばならぬといふ旺盛な意欲を以て立ち上つた最も際立つた存在こそ、F. J. ターナーに他ならないのである。たとひローズが個性の描寫に妙を得、H. アダムスが制度史の研究に一時期を劃き、とも、或はかのチャニングが社會的・心理的變化を強調しやうとも、前二者に於ては經濟的要因が輕視され、チャニングに於てすら其の強調する社會的諸力が必ずしも政治的發展に結びつけられず、社會的・心理的變化の重視の主張が必ずしも彼の敘述の中に實踐化されてゐない、とは屢々史家の指摘する處である。ブートミが適切にも結論した如く、アメリカが先づ經濟的社會であり第二次的のみにネーションであるならば、ターナーに於ける社會的要因、特に地理的條件の強調は、アメリカ史の根柢を突く最も有力な手懸りの一つであらう。後に「科學學派」の第二世代に於て壓倒的となる「社會學派」が空閒性、社會經濟性をアメリカ史把握の鍵としてゐる事實に鑑る

ならば、ターナーの有つ出色性を看過することは出来ないのである。或る意味に於て、ターナーこそは現代に於ける社會學派の先驅的存在であつたと言はなければならぬ。此の意味に於て、ターナー一人を取り上げて論ずることも決して無意義ではないのである。

ターナーが思想的に成長しつゝあつた時、當時の史家達の興味は未だ大西洋岸に集中されてゐた。中には中・西部地方に眼を向ける史家もないではなかつたが、その取扱ひは極めて簡單であるか又はそれと東部との關係については殆んど理解力を示さなかつた。云はゞ當時の米國史は擴大された新英州史であつたのである。だが、この頃から少數の史家は西部に着目しつゝあつた。ブライスは勿論、ネーション誌の主筆ゴッドキン、或はかのマックマースターはそれである。従つて、アメリカ史に於ける地理的要因を強調した人はターナーを以て嚆矢とするのではない。併し乍ら、彼が名論文を公讀するまではフロンティアに關する明確な表現は提示されなかつたのである。今こゝでターナー説に觸言する餘裕はないが、師

H. B. アダムスのドイツ的理論の適用に不満であつた彼は、米國的環境による米國史把握を主張したのであつて、洵に「アメリカ文明をしてヨーロッパ文明と區別せしむるに至つた特殊な要因」の究明こそターナーの根本問題であつたのである。彼の著作は「本質的に叙評的、解釋的」であり、彼に包括的な歴史敘述を求めても無駄であつた。併し乍ら、彼の見解は渴者に水を與ふる如く、「ターナー學派」を確立せしむるに至つたのである。R. G. Thwaites, C. W. Alvord, Archibald Henderson, S. J. Buck, C. E. Carter, H. C. Hockett, 或は F. L. Paxson 等は其の代表者である。

而らば、今日、ターナー説に對して如何なる批判が向けられてゐるであらうか。小稿に於て之を取り上げることは不當であるが、米國史研究者にとつて之は不可欠な問題であるが故に、その一端のみを極く簡単に一瞥したいと思ふのである。

ターナーはフロンティア論を發展せしめるに當つて、一度ならず自問し又友人達にも其の可否を訊した。だ

アメリカ史學に於ける「科學學派について」

が、チャニングが其の價値を疑問視した以外には、殆んど有力な反駁論は出ず、それは恰も史學上の一定理の如くに取扱はれた。併し乍ら、比較的最近になつて、發する反駁論が彼の見解に對して下されるに至つた。例へば、ハーヴァードの B. F. Wright の説（一九三一年冬「イニール評論」に掲載）に従ふと、國家の發展をフロンティアから解釋することの明らかな欠陥は、アメリカ民主主義の成長が西洋文明全體の進歩の一端であるといふ事實を無視する點に在る。合衆國に於けるデモクラシーの興隆を論ずるに當つて適當な出發點となるものは、アメリカの西部ではなくてヨーロッパ的背景である。ヨーロッパからの移住者達によつて齎らされた思想や習慣は新しい土地の歴史を創る上にフロンティアよりも遙かに重要である。そして、ジャクソンの在任中數年間が西洋世界に於ける叛亂と不安との時期であつたことは記憶されねばならない。また individual democracy よりも social democracy を強調せねばならぬ理由は、フロンティアの消滅といふ事實よりも machine age civilization

第三十一卷 第三・四號 五一

なるものに在るのである、と。更に他の反駁は、一八九〇年に於けるフロンティアの消滅は重要な意義を有しない、蓋し、未だ移住しうる廣大な面積が開放されてゐたからである、旨を主張してゐる。或は又、曾て東部の不平者達の安全辨であつた土地は殆んど彼等の手に歸さず、投機師と鐵道業者の所有に歸したこと、フロンティア地帯は其の隣地に住んでゐる農夫の定住する處となつたのであつて、都市の失業者によつてゝはない、従つて彼等は往々にして西部へ行く代りに生計のため國外に出たのであつたこと、を以てターナー説に強硬な反駁を下す者もあるのである。

併し乍ら、たとひターナーがデモクラシーを促進させる契機としてフロンティアの役割を過大視したにしても、西漸運動はアメリカ史のコースに深い影響を與へアメリカ的特性を形成する重要素であつたといふ彼の一般論は、今日に於てなほ眞理である。そして、時として彼の弟子達が師の見解を極端にまで押し進めることはあつたにしても、概して彼等は稔り多き成果をあげてゐるので

あつて、ターナー學派は「緑の月桂樹」の如くアメリカ史學界に照りはえたのであつた。かゝる、アメリカ史に於て特異なフイジカルな性格の強調こそ、「科學學派」の第二世代、アメリカ史學の青年期を招來する契機をなしたと同時に其の先驅であつたことを認めるのである。

之を要するに、ターナー學派はアメリカ史の發展を地理的條件に於て捉へんとしたのであつたが、其の限りに於ては、たとひそれがアメリカの發展に極めて特徴的である形而下性に着目したものであるにせよ、未だ素朴の域を脱せぬことは争ふことが出来ない。事實、彼等は社會的諸力の影響を重視しつゝも、「經濟的歴史解釋」なる言葉を避けたのであつた。大體に於て、彼等は、アメリカ史に於ける産業資本主義と賃金制度との役割には殆んど關心を拂はなかつた。彼等の着目したフイジカルな要因を更に押し進めてアメリカ史に社會學的・經濟的分析を適用し始めるのは、第一次大戰頃、即ち「科學學派」の第二世代に至つてである。アメリカが第一義的に經濟的社會であるならば、地理的解釋が同じく此の範疇の中の

より進められた段階、社會學的經濟的に解釋まで發展すべきは當然であらう。ネヴィンスが「恰も世界大戰の前後に新史學の潮流が現はれ、過度に陥つたスペンシヤリゼイション（科學學派の陥る必然的運命）から歴史を救ふプロミスを與へた」と言つて、一つを傳記の分野に於ける活動、他を社會學派の活躍としてゐるのは故なきではない。かくして、廿世紀も初年期を過ぎてから、「科學學派」はその長短のいづれをも第二世代へと遺録し、若き世代の人達に呼びかけるのである。その長所とは、あくまで純客觀的に歴史を探求せんとする極めて冷靜な科學的方法であり、その短所とは、長所の反面として生ずる世界觀の欠除（又は否定）である。當學派の特色とするスペンシヤリゼイションの旺盛は、協同著作への方向を決定すると共に又これに向はざるをえない運命を擔ふものである。ハートの「American Nation」グランドマンの「Chronicles」近くはシュレジンガー等の「American Life」が如何に見事であらうとも、夫等はチャニングのものとした大卷に比して、ヴァエティの面と統一性の面とを加減して果し

アメリカ史學に於ける「科學學派について」

却如何ほどのプラスがあるであらうか。其の長所の故に却つて個人による獨創性のある大卷物の實現不可能の傾向、「行爲としての歴史」觀の欠除を招く懸れのあることは看過し得ない。凡そ歴史著作なるもの、大半は一つの解釋學的性格を有する。たとへば解釋を強調する程度に差があるにすぎない。初期の史家達の神學的解釋、バンクロフト、パークマンに於ける自由を愛する人民と傳統主義者との鬭争の理論、そして「科學學派」に於ては————そこで解釋はタブーとされた。だが彼等は屢々、政治改革が導く論理的結果は國民國家であるといふ理論を押し進めたのである。廿世紀の十年代に於て、傳記物の隆盛を見、又、アメリカ史はアメリカ的要因に於て捉へらるべしとし（既に其處には歴史に於ける主觀性の是認が見られる）其の故に社會經濟的觀點を最も重視する史家の出現したことは、今やアメリカ史學が充分なる自覺の域に達したことを示すものである。「科學學派」の第二世代が歴史研究に於ける技術的完全さを遺承し更に第一世代の有となかつた（寧ろ否定した）「世界觀」を自覺し自己自身に

第三十一卷 第三・四號 五三



對して懷疑し反省する段階に達したことは、明らかに此の學派の成人であり、現代アメリカ史學の充分な意味での成長であつたと言はねばならない。此處に吾々は、一方に於て社會學的立場を主張し他方に於て——實は兩者は一であるが——「信の行爲としての歴史」を大聲するチャールズ・ピアード一派のアメリカ史學に於ける地位を理解することが出来ると思ふのである（今日ピアードはアメリカの學界及び大衆の間に極めて著名である。其のことは必ずしも彼が大家たることを意味しない。勿論それもあらうが一つには彼が教科書の作成者、史料の公開者、更には「問題提起的史家」であることに原因するやうに思はれる。彼の著名な姉妹篇 "The Iaca of National Interest, 1934", "The Open Door at Home, 1934" を紹介したデネットとベミスの二人の有名な外交史家が一樣に「アメリカの思想家にしてピアードの説に悉く賛成する人は殆どないであらう、併し又、彼の説のすべてを排斥する人もないであらう」旨を表明してゐるところは、問題提出者としての彼を端的に示してゐると思は

れるのである）。

ピアードの教師の一人オスグッド教授は曾て次の如く言つてゐる、「吾々の時代の人達は憲法上・制度上の大論争の眞只中に成長した、従つて吾々の興味は制度史の方面に向けられたのであつた、今や深刻な經濟上の諸問題が持ち上つた、若き世代の人々は歴史の經濟的諸様相に關する研究に没頭するであらう」と。一九一三年にピアードが「憲法の經濟的一解釋」を公けにした時、それは「大學の安らかな静けさの中に砲彈を打込んだもの」であつた。憲法の如き經濟問題とは恐らく縁遠いと思はれるものゝ中に内的な經濟的動機を潜んでゐることを一つの解釋として提出した彼の書物が、忽ちにして賛否兩論の嵐に捲き込まれたことは想像に難くない。勿論、當時に於て憲法の經濟的要因に着目する人はあつた。併し、史學者にして細心なる史料の調査と詳細なる分析とによつて、而も曾てターナーがかの講演に於てなした如く、今度は書物を通じて、かくも激烈に敢然としてアメリカ史學界に一つの問題を提起した人は、一九一三年の彼を以

て始まるのである。而もそれが一解釋として示され、更にそれが經濟的要因の強調と結合せられてゐることは、彼が「科學學派」の中から成長し乍ら敢て之に挑戦する姿を示すものである。それはピアード個人に代表された現代アメリカ史學の成長の有力な一つの叫びであるであらう。而らば、ピアードが父祖への挑戦の道具としたものは何であつたか。それは筆者が屢々指摘した如く、第一世代「科學學派」に於ける「純歴史」の主張の放棄、即ち「信の行爲としての歴史」——世界は collectivist democracy の方向に動いてゐるといふ彼自身の「信」から行爲せられる歴史に於ける社會學的・經濟的要因の重視、にあるのである。

一九三三年ウルバナに開催されたアメリカ史學會の席上、ピアード會長は "Written History as an Act of Faith" なる有名な講演を試みた。

史料を選擇し秩序立てる上に於て史家の個人的偏見、社會上・經濟上の經驗は決定的な役割を演ずる。歴史を書く行爲そのものに於て歴史家は信の行爲 (An

アメリカ史學に於ける「科學學派について」

ct of Faith) を遂行するのである。かくして彼は公的問題を取扱ふ政治家の立場に在る。即ち書くことに於て行爲し、行爲することに於て事物の性質についての意思に關し種々の選擇をおこなふのである。彼の信は根柢に於ては眞實なるものは歴史の動きを廻つて知られるといふ信念であり、彼の信念は主觀的なる決定であつて純粹に客觀的な發見ではないのである。歴史家は科學的方法を用ひ続けねばならぬ。併し、その限界は容認されなければならない。何となれば過去を悉く完全に再現する如き歴史の科學は確立されえぬからである。今日の歴史家の課題は現代的思想への彼自身の關係を明らかにすることである。そして時代の趨勢を讀むことこそ彼の任務なのである。

既に一九二五年に時の會長ロビンソンも新史學の出現を要望してゐる。かくの如く、自己の辿り來たつた道を回顧し懷疑し、長所を伸ばしてより深まらんとする「科學學派」の第二世代は、文字通りアメリカ史學の成長を、従つて亦アメリカ國民の成人を物語るものであら

第三十一卷 第三・四號 五五

う。一九二七年に公刊されたシーグフリードの名著がヘミングによつて「America Comes of Age」として英譯されたことは、極めて深い意味があるであらう。即ち「現代の合衆國」は「成年に達したアメリカ」なのであつた。それは譯者たる一英國人の一アメリカ私觀を示すよりも、より深くアメリカの歴史の現實を表はしたものと言へるであらう。あくまで科學性を有ちつゝなほ主觀性を自覺すること、それは精神に於てオスグッド、チャニング等を超えて、却つて彼等が克服したバンクロフト、プレスコット、パークマンに一層近づぐことである。數年前邦譯せられたアダムスの「Epic of America」の如きは、漠然とではあるが會ての文學的歴史の得たポピュラリティを取りかへしたと言はれる。或は又、最近に於てターナー學派からの影響として却つて Cultural Regionalism が非常に強調されてゐると聽く。それは一面に於ては、會ての活力に充ちた傳統(ターナー學派)の中のはぐれた糸を拾ひ上げんとする企てとあり、一面に於ては、餘りにも雲狀なる國家的模樣(右學派の行すぎ)

に對する急激なる一反動である、と言はれる。社會學派の優勢な現代アメリカ史學の中に、また斯かる文化的・文學的要因が重視され而もそれがノン・アカデミシアンによつて擔はれてゐるといふ復古的事實は、アメリカ史學が未來に於て有つ輝かしき健康を豫約するものではないであらうか。

「あとがき」

近來、多年に亘つて史學界を風靡して來たドイツ史學が行詰りに陥つた、今や新しい史學が建設されなければならぬ、アメリカ史學は未だ稚拙であるとはいへ其の有力な一つである、といふことが屢々口にせられて來たが、このことは今日に於て又將來に於て強調せられ続けるところであらう。ドイツ史學がその内的な深まりにも拘はらず或はその深まりの故に、形而下性の欠除「エントヴィックルング」的把握の行詰り等の苦悶に喘ぎ、之を克服するものとして即手即感的な極めて具體的な要因への着目、空間性の重視、或は高次のプログラムの把握などがあげられるとするならば、アメリカ史學こそは新しい

史學としての素因を有つものであらう。吾々はアメリカ史、アメリカ史學を知るためには其の根柢に横はる形而下性、空間性、プログレシ性に着眼しなければならぬのであるが、併しそれは常にアメリカ理解の手段としてあるのみでなく、より重要な問題にまで繋がるものを有つのである。アメリカ史、アメリカ史學の探究が、單一國民主史、一史學の探究に了るのでなく、新しい世界史の秩序、新しい世界の史學、の誕生と成長とにまでつらなる運命を有することを痛感せざるをえないのである。

筆者は最近、ニューヨーク市立大學助教授 Michael Strauss の "A History of American History, 1937" を一讀した。此の書物は極めて穩當・平易にアメリカ史學の發達を全般的に取扱つたものであつて、良・不良によつてではなく便・不便によつて其の價值を問はるべき體の書物である。謂はゞ、最もアメリカ的な書物である。併

し乍ら、これは著者自身も云ひ筆者もかく認める。「アメリカに於ける唯一の包括的な米國史の歴史」であるところ若干の關心を促がすものがあつた。小稿は、少數の書物・論文に當つてから後に通讀した此の書物の讀後感から草せられたものである。内容の不備たることを言を俵たない。併し乍ら、今次大戰の間に發達したであらうアメリカ史學の現状を知る山もない吾々は、現在及び將來のアメリカ史學の、又は未來に於ける新しい世界的史學の性格と動向とを窺ふ前段階として、三〇年代までのそれを辿ることは無意義ではないと思ふ。新しい史學のためにも、新しい世界秩序のためにも、アメリカ史學、アメリカ史の健やかな發達を望むや切なるものがあるのである。

(昭和二十一年、二)